よび表象体系を規定するというのである。[65] しかもこの形態学的要因の決定的作用はモースが呪術の説明に際して用いた全体社会的現象の考え方とはかなり異ってくる。しかもまた社会形態学的要因の決定と構造要因間の平行的規定への移行の問題というそれまでのデュルケーム、モースの考え方から変化が見られる。エスキモー社会の研究の結論としてモースは「一般的に人間は二つの集合の仕方をもっており、この二つの集合の形に応じて二つの法律体系、二つの道徳体系、二つの家族経済および二つの宗教生活をもつことが明らかになったという。[65] つまり、そこには社会的形態学的要因の文化への影響と住居の形成的構造と観念の形成的構造の間の類似という二つの特徴が見られることになる。[66] この段階までのモースには因果関係の思想に構造的思想を排除することはみられなかった。だからモースの結論はデュルケームの結論と同じであったのであるが、エスキモー研究ではモースとデュルケームの形態学的決定論の考方とは距離があるものと考えられるのである。デュルケームはこの後「宗教社会学と認識論」をかいているが、この論文は「宗教生活」の序文として採用されているから、これからの問題は「宗教生活」における知識社会学の考察になってくる。ここでこの論文の表題が示しているように認識の社会学すなわち範疇の社会学が彼の最大の関心事となってくるのである。なおここでデュルケームが認識社会学と理解しているものはM. Scherer が考えたような Wissens-soziologie ではなく W. Jerusalem がのべている *Soziologie des Erkennens* なのであることは銘記されなければならない。[67] デュルケームはこの点について「イエルザレムは社会が個人の生活にかさなる独自な独創的な生活の源泉であり、この創造的力は人間の知性ばかりでなく、感情や意志にも効果をもつのであると認めている」とのべている。[68]「分類の未開形態」において残存して見られた形態学的決定と集合意識からの知識の発生との間に躊躇していた態度から一歩脱出する進歩がそこに認められるのである。[69] そして社会の影響力が最も明確に見られるのは宗教表象である。自然の中に分散する霊魂とか精霊、悪魔などの神秘的な力、恒常性のない、持続性のない幻想状態などは、もしそれらが純然たる個人的夢想以外のものでなかったら思想史上に何の役割を演じなかったであろう。人間は相互に彼らの観念、および感情を伝達し合ってきたので、彼らの一致はその確信において強化されることになる。こうして相互の印象は集合的となることにより、固定し、結晶化される。デュルケームはこの作業を社会的凝縮化とよんでいる。[70] そして宗教生活においてはデュルケームは突然、宗教的知識の社会的創造は種々の形態をとるという新しい考え方を表明する。この社会的創造の種々の形態として次の四つを区別する。一はすべての社会は宗教的知識を創造する、あと三つは最初の創造を第二次的の創造物でそれは最初の創造物を別の形の知識にかえるものであるが、それは民衆的創造、神学的創造、および科学的創造である。第一の観念はわれわれが先進社会においては稀にしか例を見られない集団が規則的に知的斉一性を実現するのだがそこではすべてが成員全員に共通であり、すべてが斉一的であり、単純なものである。この第一の集合的思考の第一段階に現れるのが民衆と司祭による宗教的知識の創造段階である。最後の段階は原始の集合意識が科学的練成の対象となるものである。[71] 人びとが彼らの行動を自らに説明する理由は学問的に練成されていない。それらは実際これらの行為を決定した動機により近いものである。デュルケームは宗教思想に要素的形態からその後の発展した形態までの連続性を確保することに努力してきた。すなわち創造性の様式によって集合的様式、民衆的様式、貴族的様式（神学的）、科学的様式という区別がそれである。しかし同時にもう一つの別の重要

65）G. Namer, *op. cit.*, p. 60
66）*Ibid.*
67）Jerusalem の認識社会学についてデュルケームは *Année Sociologique* X1 において書評を行っている。
68）*A. S.* X1p. 42
69）G. Namer, *op. cit.*, p. 63
70）G. Namer, *op. cit.*, p. 74.
71）*Op. cit.*, p. 67.